

漱石全集

第三十四卷

漱石全集  
第三十四卷

別

冊

下

全三十四卷 第三十四回配本

昭和三十三年十月十二日 第一刷發行 ©

漱石全集 第三十四卷

定價 一五〇圓

著者 夏目漱石

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地  
山田一雄



發行所

東京都千代田區  
神田一ツ橋二ノ三

株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

## 目次

### 談話

英國現今の劇況

批評家の立場

戦後文界の趨勢

現時の小説及び文章に付て

本郷座金色夜叉

イギリスの園藝

水まくら

無題 — 巴里の女役者など —

昔の話

予の愛讀書

「余が文章に裨益せし書籍」

文學談片

落第——「名士の中學時代」——

夏目漱石氏文學談

文章の混亂時代

文學談

「現代讀書法」

女子と文學者

人工的感興

作中の人物

文章一口話

文學者たる可き青年

「自然を寫す文章」

余が『草枕』——「作家と著作」——

二〇八 二〇六 二〇三 一九九 一九六 一九二 一九〇 八八 八二 八〇 七五 七三 六九 六六 六四

滑稽文學

將來の文章

家庭と文學

僕の昔

漱石一夕話

無題 — 桂月の事 —

愛讀せる外國の小説戯曲

夏目漱石氏談

『坑夫』の作意と自然派傳奇派の交渉

近作小説二三に就て

無題 — 倫敦といふ處は —

「露國に赴かれたる長谷川二葉亭氏」

獨歩氏の作に低徊趣味あり

文章之變遷

一二

二六

二八

二六

二三

一四

一五

一五

一四〇

一四七

一五二

一五三

一五四

一五七

正岡子規

「處女作追懷談」

「何故に小説を書くか」

文學雜誌

無教育な文士と教育ある文士

専門的傾向

「小説中の人名」

無題 — 文部省の展覽會 —

「文藝は男子一生の事業とするに足らざる乎」

「新年物と文士」

ミルトン雜誌

「私の經過した學生時代」

文壇の變移

私のお正月

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

「文士と酒、煙草」

小説に用ふる天然

ポーの想像

「予の描かんと欲する作品」

作家としての女子

『俳諧師』に就て

讀書と創作

メレデイスの計

感じのいゝ人——「故「葉亭氏追憶錄」——

「夏」

テニソンに就て

「文士の八月」

「執筆 時間、時季、用具、場所、希望、經驗、感想等」

汽車の中——國府津より新橋まで——

一九

二〇〇

二〇一

二〇五

二〇八

二一〇

二一一

二二三

二二七

二二九

三三〇

三三三

三三四

三三四



|                 |     |
|-----------------|-----|
| 「昨日午前の日記」       | 二二六 |
| 色氣を去れよ          | 二二七 |
| 對話——本間久著『枯木』序—— | 二二〇 |
| 語學養成法           | 二三三 |
| 博士問題            | 二四一 |
| 博士問題の成行         | 二四三 |
| 西洋にはない          | 二四五 |
| 夏目漱石氏の談片        | 二四六 |
| 稽古の歴史           | 二四七 |
| 漱石山房より          | 二四九 |
| 『サアニン』に對する四名家の評 | 二五一 |
| 「文士の生活」         | 二五二 |
| 漱石山房座談          | 二五七 |
| 釣鐘の好きな人         | 二六三 |

夏目先生の談片  
文壇のこのごろ  
沙翁當時の舞臺  
文體の一長一短

二五  
二六  
二七  
二八

補遺

雜篇

二九

〔咄哉帖自題〕

俳句

三〇

解説

三一

注解

三二



談

話



## 英國現今の劇況

西洋の芝居と云つても、此前に話をした事があつた英吉利の芝居のこととして、別に其時も調べて纏つた話でもなかつたのですけれど、只記憶しただけの事を話したのみなのでした。尤も誰でも知つてゐる事で、殊に近頃は外國へ芝居を調べに行つた人もあつて、その人達の見て來た事も、他の文藝の雜誌に出ますから、それを殊更私とその専門の雜誌に向つて、お話をすると、いふ程の價值ねちもないと思ひますが、折角の御依頼でありましたから、お話を致しませう。

大體はこの間話をした通りであります、草稿もなし忘れて居ますから、すっかりとは行きませんけれど、そのあらましを云つて見ますと、この倫敦には芝居と名の附くものが五十ばかりあつて、その外にミウ

ジツク、ホールといつて歌舞音曲の様なものを演る（日本で云ふ寄席のやうなもの）處が、大小合はせて五百ばかりあります。それでその大きなものになると、譬へばストランド街にあるカゼント\*、ガーデン座が三千五百人位入りますが、最下等のホワイトチャペルと云ふ處にある極安の芝居になると、四千人程入ります。だけれど均なして普通五六百人といふ處でせう。だからして五百人平均とすると、毎夜この興行物を見て暮す人は、二十七萬五千人になります。それでこれ丈の澤山な人が行きますが、その内で重なる座をいふと、今いつたカゼント、ガーデン座ですが、これは純然たる芝居と云ふよりも、寧ろオペラやフアンシー、ボールなどを演る處です。それからストランド街の東の方でテームス河に架かつて居る、ウオータールー橋の畔ほとりにあるドルーレー、レーン座が大きなもので、これは由緒のある劇場シアターでして、昔の有名なカリツクだとかキンダとか、或はケンブル\*或はシドンス夫人などが出勤

した處なのでして、此座の特長はクリスマスの時分に、パントマイム(編者曰く。この説明は後にあり)を演るので有名なです。その次はその近所に現今英吉利の團十郎たるアーギングが出勤する、ライシイアム座と云ふのがあるのです。それからその邊りには澤山有名な座もあります、その名前ばかり擧げては詰らないから略しませう。そこで中央道路たるオクスフォード街から、所謂流行の根源地(流行と云ふ事が日本の重に花柳社會から來るのとは違つて、英吉利では上等社會から流行り出すのです)たるウエスト、エンド一帯の方へ行きますと、一番に目立つのがヒズ、マゼステイ座でして、こゝは先達てまで女皇の御在世の時は、ハー、マゼステイ座と云ひましたが、崩御の後にはヒズ、マゼステイ座と改稱してトリーといふ役者が出る處です。『新小説』か何かにトルストイの劇を演つたといふ、抱月さんの通信のあつた劇場です。その向側にそんなに大きくはないけれど、ヘーマーケット座といふのがあ

ります。又二三町隔てて西南の方のセント、ゼームス街に街の名を附けた、セント、ゼームス座といふのがあつて、そこはアレキサンダーと云ふ役者の出る處で、ステーヴン、フヒリプスの劇詩、パオロ、エンド、フランチェスカを演つたのが即ち此座なのです。その他この界限ストランド街邊りには、同じ様なものが澤山あります。それからこのウエスト、エンドには所謂ヴァラエティと稱して、純粹の劇場ではないけれども、曲馬、手品或は道化芝居といふものを混せて興行して居る有名な、パラスとかエンバヤーとかいふものが四五軒ありまして、これは皆大劇場と匹敵する位な、寧ろそれより内部の構造などは立派な建築なのです。その他單に芝居と號して居るものは、先にお話をした通りの數で一々擧げる事は出來ないが、その純粹の芝居を演る處は少いので、或處では道化芝居や茶番見たいのものを演つたり、或は音樂入の狂言見たいのものを演つたり、所謂高尚の意味に於ての劇を演る處は寧ろ少

いのです。

それからその劇場には、この座長といふものがあつて、これをマ子ジング、デレクターと稱して、それは同時に芝居の持主或は借主を兼ねて居て、しかも役者の内の大頭がやつて居るのです。假令<sup>たとへ</sup>ば先刻お話をしたヒズ、マゼステイ座の座長及持主はトリーで、セント、ゼームス座の座長及借主はアレキサンダーといふ風になつて居ります。尤も小さい芝居とかイースト、エンドの方の場末の芝居になると、そんなものはない様ですが、場末の芝居などにはない譯で、つまり極つた役者が出ないからです。然し代り<sup>く</sup>何々一座といふのが廻つて來るのでして、これはまあ田舎も同じ様に廻つて來ては興行するのです。それからウエスト、エントなどで大きなものが當ると、その興行を打上げて、時には廻つて來る事もありますけれども、多くの場合には當つた芝居を、他の一座が傳授を受けて方々持つて歩くので、謂はゞ當り狂言の忠臣藏といふ様なものを、この場末へ來て演<sup>い</sup>るのです。さういふ譯だから大きな役者の座長とかいふものは、かういふ座には附いては居ないのです。その他は今のマ子ジング、デレクターの外にジェラル、マ子ジャヤーと稱して、一般の事務を支配する事務長といふやうなものがあつて、それから舞臺の事を管理するステージ、マ子ジャヤーといふ者があつて、又その座の音楽を監督するミウジカル、デレクターといふ者があつて居ります。それで今度はどういふ芝居をやるとか、役をどう付けるとかいふのは座長がやるので、又道具立をどうしようとか光線の工合をどうとか心配するのはステージ、マ子ジャヤーがやるので、音楽や何かはミウジカル、デレクターがやり、一般の客の待遇<sup>あしちゆう</sup>とか、合間々々に客が出て飲食等をする注意をしたりその他の雑務、假令<sup>たとへ</sup>ば芝居に就いての手紙の交渉等はジェラル、マ子ジャヤーがやるのでして、皆さういふ風な機關で出來て居るのです。

それから劇場の中の見物する席に就いてお話をしま



すと、席料の一番高<sup>たか</sup>價いのはプライエート、ボックスといつて、これは五十圓から十圓位で一圓買切つて、その中へ勝手に幾人でも入るので、その値段に高下のあるのは、一番低い處が高價いので、段々になつて二階三階となるほど廉<sup>やす</sup>價くなるのです。このボックスは數に限りがあつて澤山はないので、其處は舞臺を臨んでその兩側に、舞臺を斜に見る様に一側づゝ段々と三階位のものが付いて居るだけなのです。これが高價い處であるけれども、見るには横からですから、見好い事はなからうと思ひます。その次はストールといつて、これは日本の土間で、もつとも正面から舞臺を見る處ですが、見るのには一番好い場處ですから從つて價も高く、大概大きな芝居ですと、一人席五圓二十五錢位です。このストールの後に少し高くなつて矢張舞臺を正面から見る安い席があります。これをピットといつて、そのピットが一番初めの側はストールの一番後の席と付いて居るから、極上等で、値段は安く一圓二十

五錢位です。併し場末の芝居へ行くと、このストールも從つて大變に安くなつて二圓位の處もあります。その次のはぐるりと階廊の様になつて居る二階で、これは座によつて名が違ひ、或はバルコニーとも云ひ、或は他の座へ行くとドレス、サークルともいつて、一人席三圓七十五錢位です。その次になると、又その上に三階が廻つてあつて、これも處によつて名が違ひますが、まあアツパー、サークルといつて居りまして、これも一人席二圓五十錢位です。又その頂上をガレリーといつて、こゝが日本の追込、即ち一番最下等の處で、一人前二十五錢位です。尤も大きな座になると、このガレリーの下にまだもう一つ階廊の様なものが付いてあります。

そこで席にはリザーヴド、シートと、アンリザーヴド、シートの區別があつて、前のリザーヴド、シートといふ方は一人が一人の席を占める様に出來て居て、その席は緩りとしたもので、腕をかけるやうな處が腰掛